

A
C
T
3
6

そして | 咲いている

藤田ヒロシ

原作

「桜の樹の下には」

梶井基次郎

≪登場人物≫

俺

自由人と言えば少し聞こえがいい。陰気な部屋に住むその日暮らしの貧乏人だ。暗く寒い季節が終わつたというのに、何一つ浮かれたものはなく、むしろ心を重い雲が覆いかぶさり、ここ二・三日は部屋に閉じこもつてゐる。

音楽と共に闇の中に一瞬見える「俺」の姿。音楽が終わると再びの
闇と静寂。

暗闇に浮かび上がる「俺」のシルエット。

未だ心の底から信じられる美しさにたどり着けないでいる。何故って? この先にあると進んでも、結局はここに戻つて、同じ景色を眺めているではないか。

これは伝承ではない。呪いだ。

様子が見えてくる。狭い部屋。テーブルと椅子があり、まわりはひどく散らかっている。

寝間着姿の俺がテーブルで独楽を回そうとしている。しかし、上手く回らない。

適当にやつてくれ。どうもここ一・三日一いや、体がどうだっていう話ではないが一心つてやつがどうもうまくいかないんだ。

と、足元に転がってしまった独楽を手に取る。

なら、お前が時々片付けに来るというのはどうだ?

(大袈裟に手を振り)そんな理由も義理も暇もないことくらいわかっている。大丈夫だ。ここが埋もれてしまうほどのごみを出だす精力はないんだ。

と、また独楽を回そうとするが、やはり上手くいかない。

(手の独楽を見つめ)見つけたのさ。こいつを探していたわけではなかつたがーそれだつて何でそんなことを考えたのかわからないがーそういうえば安全剃刀の刃が何処かにあるはずだと、不意に頭に浮かんできて……、
と、部屋の中をウロウロとしはじめ、
それでこうやつて、部屋中を引っ搔き回して、こいつを見つけてたというわけだ。

と、引き出しの奥から取り出したような仕草で、独楽を見せる。

するとどうだ、不思議と、こいつを探していたような気分になつて、こいつを回したかったような気分になつてー

と、独楽をようやく回せる。

独楽だけが回っている。

独楽が止まり、ややあつて、

俺

俺

俺

俺

俺

俺

なあ、見事に回っている独楽、勢いを失い揺れる独楽、完全に止まつた独楽、お前はどの独楽が最も美しいと感じる？

と、また独楽を回す。それを見つめながら、

なら、桜はどうだ。真っ盛りの桜、散つてゆく桜、花も葉もすっかり落とした桜、どれだ？

そうだ、お前にしてみれば、唐突なーでも俺にしてみればずつとだ。

また、咲いたんだろう？

と、独楽を勢いよく握り、

ん？それは「薄暗い陰気な部屋に籠つていて、何故桜が咲いたとわかる？」と聞いているのか？

と、独楽を弄び、

お前、それがわからないのか？

と、独楽を置いて部屋をウロウロと、何かを探し出す。

(一旦止まり) 便所はそっちだ。汚いが一応鏡がある。覗いてこいよ。その美しい阿保面をさ。

と、酒瓶を探し当て、テーブルのグラスに注ごうとする。

まずは、花より……

が、中身は空。瓶の口を手のひらに当て、その手のひらを舐める。

力ネだ。俺もお前も、抱えている問題は、結局はそれだ。「あれば幸せ、なければ不幸。そんな単純な話じやない」って奴もいるが、所詮はあるかないかのわかりやすい話だ。そうだろ？ いつだつて、なんだつて、付いて回るのは力ネだ。そして、お前もないが、俺はもつとない。だけどな(瓶を置き) そんなことは大したことじやアアアない。

しばしの間があつて、部屋に散乱しているものを踏みつける。

また、咲いてしまつた。

爛漫と咲き乱れ、あたりへ神秘な雰囲気を撒き散らす。それは、音楽の上質な演奏がきまつてなにかの幻覚を伴うように、また、灼熱した生殖の果てに見る後光のようなものだ。それは人の心を打たずにはおかない、不思議な、生き生きとした、美しさだ。

嗚呼、もちろん俺にだつてわかるさ。けれど俺の心をひどく陰気にするものもそれだ！俺にはあの美しさがなにか信じられ

俺

俺

俺

俺

俺

俺

俺

俺

ないもののような気がしてならない。不安になり、憂鬱になり、空虚になる。咲き、誇り、散り、また咲く。これは伝承ではない。呪いだ。

……そう思うと不思議と和んでくるんだよ。

笑うか？俺がお前だとしても……（笑って）面倒くせえ奴だな」って感じだ。けれどそれは、誰の何の笑いだ？愉快だから笑うのか？それとも笑うから愉快な気になるのか？——どちらも同じようなことにちがいない——心つていうのは誤魔化すことができる。

けれど、もう俺は笑えない。未だ信じられないのは、あの美しさのすべてを見てはいなからだ。ただの心象として見ているだけだ。そんな悔しいことがあるか？なん十年と巡つて来て——そんな惨めな事があるか？

俺が見たいのは、心の底から信じられる美しさだ。何があんな花弁を作り、何があんな蕊を作っているのか——あの美しさの源泉を——俺だって暴いてしまうことに怯えているが、それよりもはるかに強く、暴きたくて仕方がない。

そして、俺は見た——と言つても、籠つてているのだから、いつどこでのことなのか……。

静寂。そして、何かに反応して、

音楽。

（「黙れ」という仕草。手を耳に当て）聞こえるか？羽音だ。（目を閉じ）見えるか？ウスバネカゲロウだ。ほら、そこから、あそこから、ほら、アフロディットのように生まれて来る。ほら、空をめがけて舞い上がってゆく。美しい。嗚呼、彼らはそこで結婚をするんだ。美しい。命をつなぐ……美しい。

そして、目を見開き、

お前、よく足元を見てみろ。

散らかっていたものが光る。

見えるか？小さい水溜が。見えるか？そこに浮く光彩が。嗚呼、まるで油を流したような——それはなんだと思う？もつとよく見てみろ……。

静寂の後、微笑み、

そうだ！ウスバカゲロウの死骸だ。彼らの重なり合った羽が、隙間なく水面を覆い、光にちぢれ、油のような光彩を流していく

る。嗚呼、そうだ。産卵を終えた彼らの墓場だよ。

じっと足元を見つめ、

……なんて、美しいんだ。

音楽が止む。

床に寝そべり、仰向けになる。

命をつなぎ、のち死ぬ。それを目撃するのは、未だ生きているからだ！いざれそうなる身の上など忘れ、何万もの死を眺めている。あるいは、命の期限を知るために、何万もの死を見つめている。文字通り、おびただしい屍体の上で、呑んで、喰つて、笑つて、愛なんぞを語る。平和なんぞを歌う。俺もお前も、呪われているんだ。わかるか？

と、突然に上体を起こし、

惨劇だよ。それがあつて、はじめて心象が明確になつていく。わかるだろ？

と、立ち上がり、ウロウロと歩き回り、そして止まり、

これは信じていいことだ。

それまでうす暗かった部屋に明かりが指す。

音楽。それに合わせ舞うように動く。

屍体！馬のような、犬猫のような、そして人間のような、屍体はみな腐爛してウジが湧き、たまらなく臭い。それでいて水晶のような液をたらたらとたらしている。桜の根は貪婪な蛸のように、それを抱きかかえ、イソギンチャクの触手のような毛根をあつめて、その液体を吸っている。

見える！はつきりと鮮やかに！美しい！嗚呼、これは信じていいくことだ。

でなければ、何があんな花弁を作り、何があんな蕊を作つていいのかーお前は、わかるか？そうだろ？そうなんだ！毛根の吸いあげる水晶のような液が、静かな行列を作つて、維管束の中を夢のようにあがつてゆく……。

と、視線を上げ、高く見上げる。

静寂。

そして、咲いている。

美しい阿保面が見上げ、酔いしれ、乱舞する。

これは伝承ではない。はるかに根深い呪いだ。ただ美しい、ただ愉快、そんなものは在りはしない。どれほど深く埋めようと、その因果が切れる事はない。それを忘れた俺たちはずっと見ていたはずなのに、何も見えてはいなかつた。けれど、今ようやくわかるときが来た。

桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる。

これは俺たちが今こそ思い起こさなければならぬ伝承だ。それでようやく俺たちは目を覚ますことが出来る。心の底から信じられる美しさを知ることができる。笑うことだってできる。残忍なよろこびだが、それが美しき阿保面をした俺たちの一

と、言葉を絶つて、

お前、腋わきの下を拭ふいてゐるね。冷汗が出るのか。何も不愉快がることはないんだよ。それもこれも俺たちが未だ生きているからなんだ。

と、酒瓶を手にする。

その祝いか、憂さ晴らしか—どちらも同じようなことにちがいない—なあ、お前、窓を開けてくれ！花見と行こうじゃないか。

酒瓶を傾ける。酒がグラスに注がれる。

街の音、酒宴での笑い声、動画サイトの音声などが幾重にも重なり合つたノイズが「咲き乱れる」

暗転。

闇の中に響く声。

声

俺

俺

桜の樹の下には屍体が埋まつてゐる！
これは信じていことなんだよ。何故つて、桜の花があんなにも見事に咲くなんて信じられないことじやないか。

FIN

原作「桜の樹の下には」 梶井基次郎（1923年／昭和3年）

無断での上演、転用・転載禁止